

基盤研究（B）「家」の後継者育成に関する歴史的研究」（18H00979） 代表：鈴木理恵） 中間報告書 平成30年9月1日

古典書写伝来の「家」――鈴木鹿文庫――

福田安典（日本女子大学）



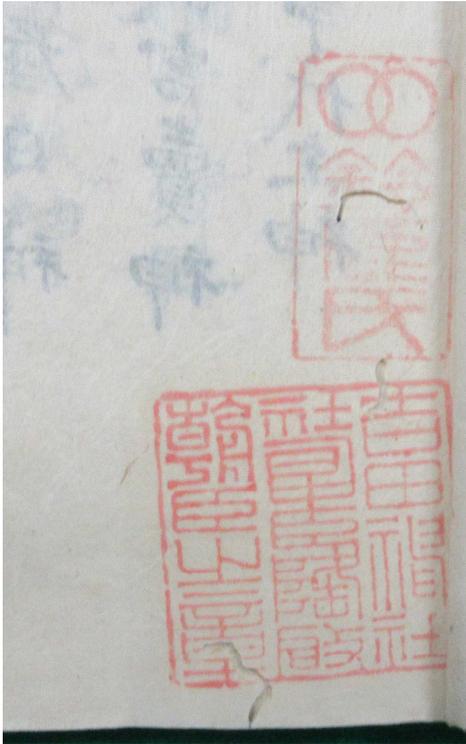


⑤ 明治大学刑事博物館所蔵 吉田神社鈴鹿家文書  
 頁、明治大学博物館目録第3号（昭和28年1月）に75  
 載され、同4号（昭和28年8月）に20頁に及ぶ。この  
 宗教、交際、儀礼、普請、戸帳、商業、学芸、子孫、係  
 年7冊、20冊、土地、家、1冊、7冊、3冊、9冊、4冊、  
 4冊、治安、3冊、家、1冊、7冊、3冊、9冊、4冊、  
 但し、たとえば、第3号「書状の部」に「学芸」に、和歌、  
 土佐日記、漢詩、漢文、狂言番付、源氏物語など、  
 易に記され、資料と、第4号「源氏物語」に、和歌、  
 2冊、漢詩、漢文、和歌、第7号「源氏物語」に、和歌、  
 学漢詩、漢文、和歌、第7号「源氏物語」に、和歌、  
 刑事博物館に所蔵されていると思われる。

⑥ 鈴鹿長雄所蔵資料  
 平成17年12月皇學館大学に寄託されている。

⑦ それ以外にも、連胤旧蔵『榻嶋暁筆』が国会図書館に特  
 収されるをはじめとして、各地での所蔵が確認できる。特に  
 連胤関係の報告が目につく。

元報告者が把握しているだけでも多岐にわたりほとんどの復  
 来の不可能であるが、それでもいくつかの事実から「古典書写  
 輪違の紋所の鈴鹿氏の蔵書印をで紹介している。



吉田家の「古典書写の伝来」の中心は日本紀であった。では  
 鈴鹿家は日本紀にどうかかいついていたのだろうか。  
 鈴鹿三十七が編集した『勅板集影』には「京都帝国大学付属図  
 書館本 日本紀」が収載されている。この本には、

巻首青蓮院宮御家蔵之本也。不思議敬芳御買得之由家記ニ  
 見ユ  
 右一覽之序為後勘愚毫畢  
 天保十四年七月 隆啓

この語がある。この敬芳は鈴鹿一族で、明和8年に80歳で没  
 する。そのように鈴鹿家も日本紀には格別の思いがあったようであ  
 る。七はかなりの量の日本紀を所有するのである。後述するようであ  
 る。

#### 4 鈴鹿連胤について

当主鈴鹿連胤（歴代の当主）において、もつとも注目されるのが五六代  
 古本「天保4年正月に小浜の国学者、伴信友が「奈良ノ蔵テ  
 所蔵購入」た保つた。今異本3月「親物を集し、見たり。友の再  
 の所蔵と「た保つた。今異本3月「親物を集し、見たり。友の再  
 の証言しか、た保つた。今異本3月「親物を集し、見たり。友の再  
 の伝来、しか、た保つた。今異本3月「親物を集し、見たり。友の再  
 の購入、しか、た保つた。今異本3月「親物を集し、見たり。友の再  
 の優れ、利した、た保つた。今異本3月「親物を集し、見たり。友の再  
 して紹介した、た保つた。今異本3月「親物を集し、見たり。友の再

自分は菲才でありながら、孫問志した。古くは全くな  
 の感化で、万巻の遺書を紙魚の餌に与へて、一人の曾やう  
 のことでは誠心相済まぬ訳である。

性と鹿意に強連る。ここに蒐集の受け継ぐ、古書「家」とい  
 る。鹿意に強連る。ここに蒐集の受け継ぐ、古書「家」とい  
 がす。







6 鈴鹿家の副本作成―『新撰字鏡』を中心に―

大槻文彦は古書の複製や複本の重要性について次のように述べている。

珍書は必ず複本を作りて、異所に蔵し置かずんばあるべからず。然らずして、火災に遇ひ、影も形も失はれし事、其例多かり、火災の外に、蠹害もあり、珍本を蔵する人には、秘して人に示さず、或は写さむことを乞ふ者あれども許さずといふ弊往々あり。心得違の極なり。余は珍本を得れば、我より同好の人に示して複写を勧むることとして居るなり。火災の事は措きて蠹害に就きて一例を述べむ。

写真やコピーがない時代、貴書にとつてもつとも恐怖であつたのは火災による紛失であつた。冷泉家が火災をもつとも恐れ、いた逸話があるが、大槻文彦のような意識をもつコレクターがいたことは事実である。

では、大槻の言う「複本」(本報告では副本で統一)とはいかなる条件を備えなければいけないのだろうか。

まず難解な旧字体よりは通行字体で書写されてもよい、逆を考えれば難解な旧字体よりは通行字体で書写されてもよい、といふ考え方があろう。

一方では、写真やコピーの代わりなので、限りなく原本の複写に努めるべきであること、時には虫損の跡までも忠実、正確に複写されるべきであることを求める考え方があろう。

後者の立場に立てば、筆と職人芸だけで、虫損まで含めてどこまで複写できれば合格なのであろうか。

鈴鹿家は「古典書写伝来の家」と言われたが、「書写の家」と呼ばれるにはどの程度が必要なのであろうか。

大槻文彦の文章には続きがある。大槻が副本の重要性の例として語っているのが『新撰字鏡』であり、その副本作成に大きく関わっているのが鈴鹿連胤である。

そこで『新撰字鏡』の連胤作成の副本を通して、鈴鹿家の「家」の技を探ってみよう。

『新撰字鏡』は昌住撰の12巻の漢和辞書。10世紀初頭に成立し、漢字を部首で分類、その発音や意味を和訓(万葉がな)で説明するといふ現存最古の辞書で、3000語以上を載せている。

長く存在が確認できなかつたが、村田春海が抄録本(和訓の注のある語だけを抜き出したもの、3巻)を見つけ、幕末に完全本が治本が見つけられた。

鈴鹿連胤はこの治本新撰字鏡の発見と、その副本作成に大きく寄与したのであつた。

『新撰字鏡』は10世紀に成立した古書の中でもかなり古い

古書である。その転写本が治元年(西暦で1124年)で原本成立は計り知れない。連胤は、抄録本として一端が知られてゐるのみであつた。連胤が治本の巻2と巻4を入手して『新撰字鏡』が書写された。その書写物を通観すれば、その連胤の情熱が、かなり自由に写したもので幅が認められる。その経緯は諸書に記されるが、年次的に概観してみたい。

10世紀初頭 『新撰字鏡』成立するも長く完本が見つから

天治1年 法隆寺で書写されるも後に散佚

寛永13年 抄録本の1本が発見される

享和3年 村田春海が抄録本発見、以後抄録本の書写拡散

文政年間 (群書類従も1巻のみ)

嘉永7年 鈴鹿連胤が天治古写本の巻2と巻4を入手

安政2年 了(大和文華館鈴鹿文庫) 12月、連胤が巻2と巻4の副本作成

安政3年 連胤が撰州西成郡の岸田忠兵衛が残り天治本10

安政4年 巻を所有することを突き止める。(現存、愛媛大学)

安政5年 伴信友が連胤所蔵の巻2、4を書写

安政6年 黒川春村が天治本12巻を書写、世に知られる。

明治13年 木村正辞が複本作成

連胤の時代でも天治本『新撰字鏡』は700年を経た古書であつた。虫損や破損が激しい。連胤とその周辺は慎重に『新撰字鏡』を書写するのだが、分量が多いうえに難解であるので、その書写作業は困難を極めたようである。

この時に連胤が作成した副本が現在二種類確認できる。一つは、この大和文華館鈴鹿文庫現存本である。巻2と巻4の二冊で、表紙に「法隆寺新撰字鏡共二冊」とあり、尚袷舎印が捺され、

いたる。天治本の巻4の組み合わせは、当然ながら連胤が所持して

かいた。この大和文華館鈴鹿文庫本は原本の忠実な複製ではなく、

語を上下に綺麗に整理し、見やすくなつてゐる。使いやすいく編

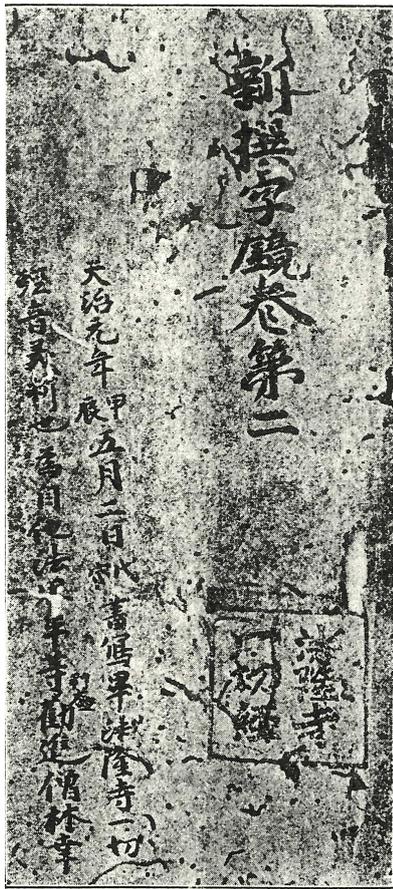
集されているのである。  
もう一本が愛媛大学鈴鹿文庫本『新撰字鏡』である。篇立、  
巻1・2・4・12の5冊である。巻末に、

安政二年乙卯十有二月 中臣朝臣連胤

とあり、続けて「再書新撰字鏡後」として、

安政四年丁巳二月

とあって、夙に鈴鹿三七が図版付きで紹介したものである。  
この愛媛大学鈴鹿文庫本『新撰字鏡』を原本と比較してみる  
(なお原本は破損激しく閲覧できないので、大正5年の複製に  
抛る)。巻2の末尾は三七の論文に原本の図影が載る。字がややゆが  
み、いくつかの虫損が見られる。



東京帝室博物館蔵

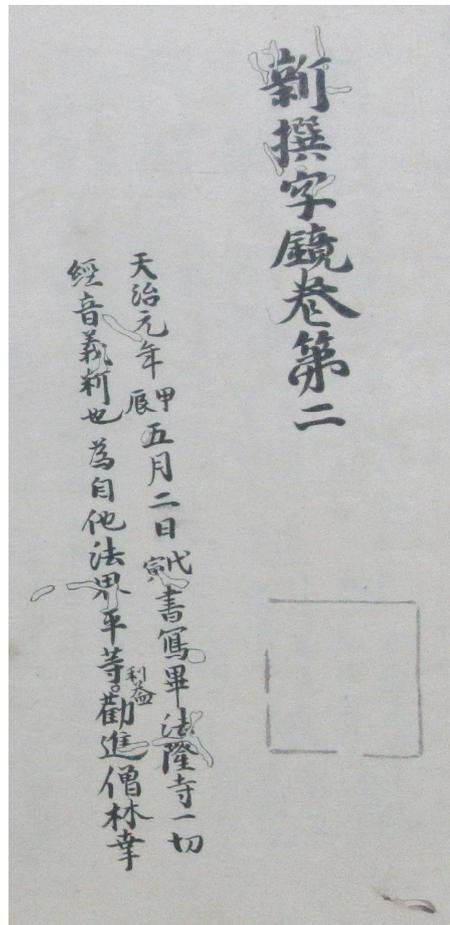
これが大正5年の複製では、

## 新撰字鏡巻第二



天治元年甲辰五月二日  
勅書寫畢法隆寺一切  
經音義新也為自他法界平等勸進僧林幸

となつている。虫損の部分が補訂されているのである。  
しかしながら、連胤作成の副本では次のように処理されてい  
る。



天治元年甲辰五月二日  
勅書寫畢法隆寺一切  
經音義新也為自他法界平等勸進僧林幸

「補訂」が施されているのである。対して連胤作成の本文は、  
原本の「忠実」な複製である。近代の写真複製よりも、安政2  
年の連胤の「手作り」複製の方が圧倒的にレベルが高い。  
大正複製では、

父 夫南反上至尊也短以 度教者也謂若為父也 昆 古文 者可反上父也此  
父 口據反去 居也平利 箸 上箸反平 吳人父 箕 戶光反平黃字 南可反上  
箸 箸也平利 箸 吳人父 箕 古文也地中色 父又地名也

親族部十三 雅不入字数何不尋知哉

高祖 力義於 保知 曾祖 於保於 保知 阿父 於保 知 外祖父 於保知 於保知  
阿耶 也 阿妣 同 外祖 母方乃 波 繼父 父 阿伯 父

にら  
か明





大槻文彦「陳書の複本の必要」(『典籍』1号、大正4年5月)  
川瀬一馬「新撰字鏡に就て」(『典籍』3号、大正4年9月)  
京都大学文学部国語学文学研究室編『新撰字鏡』  
梅谷繁樹「奈良・大和文化館蔵 鈴鹿文庫『今昔物語』について」(『園田語文』第3号、昭和63年)

基盤研究(B)「家」の後継者育成に関する歴史的研究(18H00979) 代表:鈴木理恵(中間報告書)

## 古典書写伝来の「家」 — 鈴鹿文庫 —

平成30年9月1日発行

著者 福田安典

代表・発行者

〒739-8511 東広島市鏡山一丁目3番2号  
広島大学教育学部  
鈴木理恵